
AC ~IS worldへの転生~

RAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AC→IS Wordへの転生

【著者名】

R A I

【あらすじ】

レイレナード社製のAC三機を相手にして落とされた可哀想な奴の物語。

最近ACにはまって作ってみよう…と思つたりw
思い立つた日が吉日。その日以降は凶日。という信念の元に作りましたあ！

もう一個書いてるので更新遅かつたり、駄文だつたりするけど頑

張りますーー！

〇〇話 プロローグ

いつもどおり。いつもどおりの戦場だった。俺は3機のノーマルに一気に接近しながら1機を左手のブレードでなぎ払った。ノーマルは腰のあたりから真っ二つになり、爆発した。

接近してきたもう1機のノーマルをクイックブーストで引き離し、肩武器のハイレーザーキャノンで腹の辺りに大きな風穴を開ける。最後の一弾は右手のマシンガンで体中に風穴をあけて戦闘を終わらせた。

「作戦終了……ですね。」

そう言つたのはいつも作戦をナビゲートしてくれるクロエだ。正直、彼女が居なかつたら俺は生きてなかつたかもしれない。前にもそう礼を言おうとしたが、言い切る前に「自分は何もやっていない。前線で戦っているのは貴方だから。」といわれてしまった。

「！！！ 所属不明！ いえ、レイレナード社3機のネクストを補足！ あれは・・・ベルリオーズ！？ 何故N.O.君がこんなところに？迎撃して！」

「・・・生きて、帰ってきて・・・」

「ああ、もちろんだ」

俺はそう答えると、肩に積んでいるスナイパーライフルを構えると敵が来るはずの方向に狙いを定めた。

先制で攻撃したのは俺だ。対象はベルリオーズ。距離800程度、発射。命中した、がPAに阻まれるのでたいしたダメージはないだろう。

左手にブレードを持つていつものスタイルに切り替える。まずは一気にオーバードブーストで接近してきたN.O.のベルリオーズだ。マシンガンで牽制しつつ、一気に接近してブレードでたたく。これもP.Aに阻まれるが相当地P.Aを消費しているだろう。

クイックブーストで距離をあけてからまた接近する。再度ブレードを叩き込もうとするがかわされる。マシンガンで牽制して距離を取ろうとするがそれも敵わない。

横田で他の一機も探すが、既に近くに来ているようだ。

「NJのままではつらい・・・」

俺はそう呟くと一気にたたみかけようとした。

ザンニがASIMIサイルを放つ。何とかよけるが、正直きつい。オルレアが一気に接近し、ブレードを放つ。
何とかまだ動くが、もうブーストを焚くこともできない。ベルリオーズが近づいてくる。

「わりいな。これやんないと死ぬんだわ、俺たち。」

意味深な言葉を残し、ベルリオーズはおそらく予備武装のブレードでコックピットを突き刺した。

田を開いた・・・。

眩しい、眩しそうすぎるほどだ。GAの特殊閃光弾を間近で見ても、ここまでダメージは受けなかつただろう。

「一か、俺死んだんじゃないの？夢か？」

自分の頬をつねつてみる、痛い。夢じゃないみたいだ。

「こはどりだらう。

「田覚めたか。」

田の前に女の子が立っていた。結構可愛い。口リじやないよ？まじで。

「あんた誰だ？」こはどりだ？俺は死んだのか？どつなんだ？」
「そんなに一気に質問されても・・・。

まず、私は神（作者）です。邪神です。この姿は仮です。いきなり殴られる可能性を考慮してこの姿にしました。

ここは私が作りあげた空間です。まあ、異世界ですね。

貴方は死んでいます。

「これぐらいですか？質問は。」

俺が死んだ理由は分かりきっている。負けたのだ。

「あと一つだけ質問がある。奴が・・・ベルリオーズが最後に残した言葉の意味は？」

「ベルリオーズですか・・・。彼は私（作者）ではない、もう一人の邪神に服従させられています。彼の仲間もそうです。もはや半分以上のリンクスが邪神に服従しています。現在私はもう一人の邪神と敵対関係にあります。邪神は私の管轄の世界を侵略しようとしています。

その世界には女性しか動かすことのできない『IIS』という機械があります。貴方たちが使う『AC』と同じものだと考えていただいてかまいません。

貴方にはその世界へ転生して、邪神の野望を打ち砕いてほしいのです。」

「もし断つたら?」

「生き返らせることはできないので、このまま最後の審判を受けてもらいます。」

「最後の審判って?」

「善か悪か、天国で暮らすか地獄で暮らすか、を決めるところです。私が見たところ貴方は地獄の方かと・・・」

「分かった。受けよう。俺にはIISが使えないがどうやって打ち砕けばいいんだ?」

「現在貴方が使っているACをIISサイズにします。邪神は、世界に直接手を加えることができないので奴の手駒をすべて撃破してください。」

ついでに、ACの機体パーティや武器をすべて使えるようにします。準備はいいですか?」

「ああ。」

「じゃあ・・・墮ちてください^_^」

突如俺の足元に大穴が開き、俺は落下した・・・

〇〇話 プロローグ（後書き）

>補足説明<

主人公について

クロノ・アルジーク・オブアイレン 17歳 男

名前からしてホワイトグリントの子供

え？ 設定が無茶だって？ 気にしない！

だって私はこの世界の神！（邪神だけどｗ）

01話 ～始まり～（前書き）

短いです。二次創作よりオリジナルのほうが楽だと思つのは何故でしょ？

01話 ～始まり～

神に落とされた俺はおそれく相当高いところから落ちてこようが、
である。眼下には暗い町が広がっている。何故か恐怖心が無い・・・。
人間、恐怖心を失つたら終わりだと聞いたことがある。

どんどん家が近づいてくる。近づくたびに現実味が増したためか、
俺の心に『死』という恐怖が生まれた。そのおかげか逆に冷静になり、
現在ACに乗っていることに気づいた。しかし、俺の知つてい
るACとは違つた。俺の体にまとわりつくようにパークが構成され
ておりコックピットがない。

ブースターを動かして減速を図るが、地面との距離が近すぎて墜
落してしまつた。幸いPAがダメージを吸収してくれたが、もつと
気づくのが遅れていたら危ないところだつた。

「だ～れっかな？お空からおちてきたのわ？？」

「・・・・・」

いい大人がウサミミつけているのは見てるほうとしてはちょっと、
いやかなりイタイ。

「あれ～？だんまりかなあ～？おねーさんこまつやうなあ～」と、
とてもいい笑顔で言つてくるのはけよつと恐怖だ。

「俺はクロノだ。クロノ＝アルジーク・オブアイレンだ。」

「ふ～ん。クーちゃんが纏つてるのってISだよね～けど見たこと
無いんだよな～、あんなバーツ。
動かせるの？IS。けど、纏つてることとは動かせるんだよ

ね？」「

なにやらブツブツ言つてゐる。やつぱ怖い。

「あんたは誰だ？」

「あつ。え？わたし？」

私は束だよ！篠ノ之 束よろしくねー！」

相当考え込んでいたようで、驚いている様子が結構可愛かった。

『束はIJSを作った人だよ』

突然頭の中に声が鳴り響いた。声的には神だ。

『とこりでこじまびこだ？』

『こじ？わたしの家だよ。君やつぱりIJSを動かせるんだよね？』

「ああ」

「これつてなんていう機体なのかな？」

「ああ、これが。これはイクシオン？だ。レイ···」

危ない。もう少しでばれるところだった

「まあ、いいや。で、なんで空から落ちてきたの？」

「それは···」

『その人にはすべてを打ち明けていいよ。』

神にそういうわれた俺は、束にすべてを打ち明けた。俺は違う世界から來たこと、イクシオン？はACと言つものがベースだということ、この世界が危険に晒されていること。

束も最初は半信半疑だったが信用してくれたようだ。

『俺が言つといったからな』

神が先回りして言つてあつたらしい。
そういえば俺家が無いんだよな。

「家ならここに泊まるといつよ。EIS学園は全寮制だからそれまで
ここに。」

「有難う御座います。」

「じゃ、部屋はこっちね。」

『EIS学園には入るの？入つたほうがいいと思つナビ？』

『入つたほうがいいと思つよ（原作的に）』

「入るうと思つています。」

「うん、ちーちゃんに話しておくれね！」

「はい」

ちーちゃんって誰？

「あつ、それと機体を見せてくれるかな？」

「別にいいですよ」

EISを作った人なら任せても大丈夫だらう。

「おやすみ～」

「おやすみなさい」

腹減つたなあ・・・と思いながら眠りに着いた。

「ん~、見たこと無い機体だし、こんなコア見たこと無い。
ん?これはブースターか?それにジェネレーター。

自分でエネルギーを作り出すIISか・・・。

拡張領域も今のIIS用装備の種類全部入れても使い切れない・・・

おもしろい

彼女は最後に『にこっ』と笑つと機械の前から離れた・・・。

0-1話　～始まり～（後書き）

下手で駄文ですが、どうかあたたかい目で見てください。

02話 ～初戦～

今日はIIS学園に入学する予定だ。もちろん1年生に・・・入学というよりも、転校？違う。

誰かが校門のところで騒いでいた。

「 んで、そんな奴が代表候補生なの！？」

うん、第一印象確定。高飛車な奴だ。正直苦手だし嫌いだ。
無視して職員室へいこう。

「お前が、束が話していた『二人目の『男』のIIS操縦者』は
束が話していたちーちゃんという人だろ？」

「はいそうです。貴女が『ちーちゃん』という人ですか？」
突然前方から出席簿が飛んできた。手刀で出席簿を叩き落したが、
当たつてたら意識が無かつたかもしない。
彼女のほうを見ると顔が赤くなっている。

「 をいつているんだ！あいつは。」

俺が思いつきり疑問の表情を向けると、はっとしたよつて顔を上げ咳払いをした。

「私は織斑 千冬だ。ここで教師をしている。話は束から聞いてい
る。お前は私のクラスへ入れ。

学校を案内されたようだ。と一夏にいつておいた。「この学校にいるもう一人の『男』の操縦者だ。仲良くなれ。」

「分かりました。」

「よし、行け。」

そう言つと、織斑先生はどこかへ行つた。

俺は教室へと向かつた。

ほとんどの女子（女子しか居ない）が俺を奇異の目で見てくる。正直言つてつらい。もし目線に物理的干渉能力があつたなら、俺はただの肉塊になつてゐるだろう。うん、間違いない。

どうでもいいことを考えながら廊下を歩いていると突然話しかけられた。

顔が良く整つていて、金髪。ドリルのようになつて髪を盛つてゐる。腰に手を当てるポーズ様になつてゐる。

いいとこ育ちか・・・これも苦手だ。大抵の奴は、仮面をかぶつてやがる。

「貴方が、私のクラスに入るという『一人目』の男のI.S操縦者ですかね？」

「ああ、だからどうした?」

「なんですね」「やめろよ」

男のほうが牽制した。

「俺は織斑 一夏。よろしくな。」

「俺はクロノ、クロノ＝アルジーク・オブアイレンだ。クロノと呼んでくれ。」

「わかった。じゃあ校舎を案内するから着いてきてくれ。」

校舎はどこも立派だった。ガラスの廊下、ACが一機入れるようなアリーナ。凄く広い。

後は、本当に女子しか居なかつた。先生も女性だけだった。

IS学園は寮生活らしい。俺には一人部屋があてがわれるとか・

まあ、女子と相部屋なんて考えられないけどな。

朝の時間目いっぱい使つたので、教室に戻つたら既にHRが始まつていた。

「遅い。と言いたい所だが、大目に見よう。」

俺は、またあの死ぬかもしない出席簿をくじりつけると想像して身震いしていた。

無事にHRは終わり授業が始まつたんだが・・・まったく理解できない。

専門用語が多くて、何を言つているのかすら分からぬといつた状況だ。

ただ一つ分かるのが、織斑先生が時折殺氣を放つと、出席簿が飛んでくるのだけだ。

次の授業も同じく。そういうえばクラス対抗戦とやらがあるらしい。

俺には関係ないが、代表同士が戦うそうだ。

一組対四組だ。四組の代表があの高飛車野郎らしいので機会があれば潰したい

まあ、ともかく今は明日開かれるクラス対抗戦だ。一夏の特訓にも付き合わなきやならない。

それにして、自称一夏の「コーチの篠とセシリ亞の説明は分かりにくい。

篠曰く「ギュンとしてからガン」

セシリ亞曰く「斜め上に42度・・・」

この説明で分かった方は、きっと天才か頭のねじが足りないのだ
わい。うん、そうに違いない。

時は流れて、対抗戦当日。

一夏と鈴が戦っていると、突然頭の中に音声が流れた。

『いるかい？まあ、居るに決まってるよな？』

向こうの邪神が動いた。敵機がこっちへ向かっている、迎撃しろ。

敵はアマジークだ。

アリーナへ向かっている。

気をつけろよ？』

（わかつたよ）

答えると俺はアリーナへ向かっていった

アリーナに行くと既に一人が戦っていた。

「何なのよーあいつ！」

「知るか！来るぞ。」

マシンガンが鈴が居るところをなぎ払ひ。

かるうじて直撃は避けたが、エネルギーももう限界だろう。

俺はイクシオン？を展開し、マシンガンでアマジークを牽制する。
現在の機体構成は〇三アリシアをベースに、マシンガンー（〇三
-MOTOR COBRA）、ブレード（〇七-MOONLIGHT
-T）のみの軽装備である。

俺はクイックブーストで一気に距離を詰めると、ブレードを振る
う。

流石に避けられるが、さらにマシンガンを浴びせる。これは当た
るがPAによつてたいしたダメージは無いだろう。

無理矢理クイックブーストによつて軌道を変え、再度接近する。

「くつ、だが仲間の命のためにも！負けるわけにはいけない。」

確かに、アマジークは何かに対抗している組織の中心メンバーで、
仲間をコジマ汚染させないとか言って一人で戦つていたんだったな。
邪神に仲間を人質に取られたのだろう。

俺も死ぬ気は無いからな。

接近した後、ブレードで叩き落し肩武器を展開する。YAMAG
Aだ。

地面に叩きつけられたバルバロイは一秒ほど動けないだろう。戦
場ではその一瞬が命取りになる。

俺が元居た世界では25000ものダメージを『える』ことができ

るお氣に入りだ。

これを使えば、バルバロイなど消し飛ぶ。

「終わりだ」

肩の武器が火を噴いた。俺は爆風で吹き飛び、天井に激突した。
そこで俺の意識は途絶えた。

02話 ～初戦～（後書き）

なんか、意識途絶えて終わるのが多いのはまぐれでしょうか？

私のせいですけどねw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6719z/>

AC ~IS worldへの転生~

2011年12月29日23時51分発行